

有島武郎全集

第二卷

有島武郎全集

第二卷

筑摩書房

有島武郎全集第二卷

昭和五十五年二月二十日 初版發行

著 者 有 島 武 郎

發行者 布 川 角 左 衛 門

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番號 一〇一—九一
電話 〇三〇六七一(營業)
〇三〇六七一一(編集)
振替 東京 六一四一二三

印刷 株式會社精興社
製本 株式會社鈴木製本所

有島武郎全集

第二卷

目次

半 日	三
西方古傳	二
老船長の幻覺	二七
かん／＼虫	四五
或る女のグリンプス	三
小さい夢	二九
お末の死	二五
An Incident	二七
幻想	二九
宣言	二九

サムソンとデリラ……………四七

洪水の前……………四七

フランセスの顔……………四六

潮霧……………四九

〔草稿・初出〕

西方古傳〔草稿〕……………四九

老船長の幻覺〔初出〕……………四九

宣言〔初出〕……………五〇

校異……………五七

解題……………五五

創作 一

半
日

地には雪、空も雪の様に白み渡つて家並ばかりが黒く目立つ日曜日の午後晚く相島は玄關にあつた足駄をつツかけて二町計りの所に郵便を入れたに行つた。歸り路に曲り角で往來を見渡したがそれらしい櫓の影も見えぬ。

「今日は廢めたのか知らん」と思ひながら横道を這入つて覺束ない足駄の歩みを運ばすと子供が風の絲目をはほして居るのに遇つた。多分は父親でも造つてやつたのだらう、六角形の四枚張りで隅に小さく「佐倉」と名前が書いてある。日本の軍人が支那兵の辮髪を握つて劍を振上げた畫の赤や青に、雪がちち／＼と降りかゝつて居る。「御免よ」と云ひながら相島は軟い雪に一足踏み込んでよけながら通つた。小兒は眞赤な顔を一寸上げて相島を見たなり又絲目をそゝくつて居る。

もう一つ角を曲ると自分の門が見えて、其の前には待ち設けた櫓が留つて居た。齡の若さうな瘦せた鹿毛が鼻尖で積んだ雪に惡戯いたづらをして居る。相島は其の馬をさすりながら又足駄を雪の中に踏み込んで門を這入ると、玄關の前に井田が居た。

「やア」

と相島は心の中で喜びながら快活に云ふと、井田は疲れた様子でそれでもほゝゑみながら點頭いて見せた。

相島は大急ぎで中の口から上つて、自分の書齋を通り抜けて玄關に出ると、書生が既に戸を開けて、暗い家の中から明るい雪の庭が眩しい様に見える。其の中に井田は矢張り少し氣の抜けた風で立つて居た。

櫓は丁度門の前にあつて荷がそっくり見える。竹行李が二つ、柳行李が一つ、漬物樽が一つ、ストローヴが一つ、大きな風呂敷包が一つ、書棚が一つ、それ等がごつたに折り重なつた上に、簡単な机が仰向けに積んであつた。

井田が黒の二重マントを式臺に脱ぐ中に出面は机を卸しにかゝる。相島は玄關の障子と奥の襖を外す。書生は玄關につツ立つて其の力強い腕に荷を運ばうと待ちかまへた。

井田は外套を脱いで身が軽くなつたと共に不圖淋しい心持がしたが、それも束の間で、直ぐ机の下にあつた行李を運び始めた。恐らくは井田が淋しく感じた其の時であらう。相島は出面が運んで來た机の隅にくつついて居る雪を指先でさらひながら「まア宜い事をした」と何んの事はなくさう思つた。

電光の如くぱつと輝いた其の思ひはまた消えて相島は一心に荷物を己れの書齋の隣の八疊に運び出した。相島と書生とが梭の様に這入つたり出たり五六遍すると、荷は室の中に運ばれてしまつた。井田は懷中から墓口を出して出面に拂ひを濟ますと、出面は一寸禮を云つて馬の轡を引いた。

「おい、そりや馬方のぢやないかい」

と相島が井田の脱ぎ捨てた外套を指すと、井田は例の軽い様で居て沈んだ語調で、

「いゝえ、是れは僕んです」

と云ひながら式臺に腰を下して靴を脱ぎにかゝる。相島は櫛の鈴に氣を取られて暫らくは耳を澄ました。

書棚の位置も定まりランプや炭取はそれ／＼の所に仕舞はれて、井田が住む可き室は彼處此處に雪のこぼれ、堆い皺くちやな新聞紙、赤と白のカタン絲で亂れた。それをまとめて書生が掃除にかゝると、井田はさも疲れた様子で隣の相島の書齋に這入つて來た。相島は仕切りの襖を締めて廊下に出て、其處の押入れから茶碗を二つと土瓶と茶筒とをつかんで來た。

相島が前膝をついてそれを雑多に疊の上に置くと、

「未だ挨拶もしないで」

と云ひながら井田は一寸ゐずまひを直して頭を下げる。相島は無頓着な風で茶筒から茶をこぼし／＼土瓶に移し

てストーヴの上の藥罐を下しながらにこついて居る。書生が隣から座敷を掃きながら、

「井田先生の來るのは大分評判になつて居ますよ。隣家ではフラヘットさんと先生の齡を卜つたら三十四とかの人だと答へた相です」

と云ふ。それを相島は引きとつて、

「うむ、長屋のアマゾン連も二三人出て見て居た」

と云ふ。井田も稍と元氣づいて、

「隣とは何處です、彼處永丘？　ア、飛んだお嫁さんが舞ひ込んで……蕎麥でも配らなけりやいけないのか知らん」

而して其の最後の蕎麥の事は稍と眞面目で云つたのであつた。然し相島は平氣で居る。

「今日は君の爲めに湯を沸かして置いたから、少し休んだら一つ片付けて仕舞つて這入つたら如何です」
と云つたが井田は容易に立ち上らうとはしなかつた。而して二人は隣の長岡家に居る白痴の青年の話を始めた。

「妾の何んなんですか」

と井田が聞く。

「さうです。妾の子でもう二十八だ相です」

「大佐は矢張り一處に居るんですか……東京ですか」

「大佐は死んでしまつたんだ——もう餘程前ですよ」
と相島が説明する。

「三十四は驚くな、然し僕は此の頃何んだか青年と云ふ時代と別れる様な氣がしてならないけれども」

井田は二十七歳である。實にいゝ齡だ。情は熱し未來の到達は未だ夢の儘で居る。實にいゝ齡だと考へながら

相島は自分が既に三十二になつたのに思ひ入つた。而して屹と頭を擧げて、

「何、君」

と勢よく口を切る。

「未だ／＼そりや人は僕等を青年としてはもう許さんかも知れないが、僕は未だ何處までも若い積りだ。さうだね、人は許さないだらうね」

と云つて齒を喰ひしる様にした。井田は、

「さうですね」

と云つてほゝゑんだ。井田は相島に對してほゝゑみつけたから、ほゝゑんだのであるが、心の中では深く相島の言葉を憐れんだ。而して又しても起る淋しい思ひをせき留め得なかつた。

「僕は君が来る前から思つて居たんですがね、是れから必ず毎週一篇づゝ創作をやつて、土曜の晩に朗讀會をしたら如何かと思ふんですが」

と相島は男らしい安坐の膝を組み直して又快活な事を云つて居る。井田は疑はし相に、

「出来るでせうか」

と又ほゝゑんだ。

「出来るさ……出来^でか
出来^でさ」

と相島もにこついた。

斯う云ふ様な話を低い聲で續けて居る中に、冬の日は急に暗くなつた。窓障子の紙の色が黒みがゝつた薄紫になつた。十日の月が光り出したのだらう。

井田は、

「それでは一寸片付けて仕舞ひますから」

と云ひながら立上つて隣に行つた。時々紙のがさつく音や重い物を疊の上に置く音がする。室は恐ろしく暗くなつて来る。相島は取殘されて疊に落ちた茶の葉を指先にくつつけてストーヴの臺の所に捨てて居る。書生が来て、「先生、湯が沸きました」

と開きの外から云つてランプの掃除にかゝつた。井田の心の中には此頃、おツかぶさる様な暗い一つの影がさまよつて居るのである。是れは恐らく彼れ程の年頃の者には誰れにでも起る影であらう。前途には眼もくらむ様な輝きがある。彼れは今迄それを心の眼でぢつと眺めて、云はば心の中にある五官とも名づくべきもので、しみ／＼と味はつて其の中に甘い悲しみと燃ゆる喜びとを感じて居つたのであるが、手を反へした様に此頃其の感じが薄らいで、彼れは肉と靈との間の痛切な吸引力に動かされずには居られなくなつた。事實に觸れ度い、事實、事實、事實、事實と彼れの全身全靈はをめき叫ぶのである。

それのみならず周囲の境遇は井田に逼つて結婚の決心を促した。こんな事は是れまで井田が思ひもよらぬ事であつた。此の不可思議な人生の一事件を全く客觀的に見て、井田は随分大膽な解釋を爲して居たが、事實に踏み込まうと云ふ彼れの心と其の友等の熱心な勸告と、斷ち切り難い人の習慣とが激しい權威を振つて彼れの上に臨むのである。若い弾力性のある心が、善惡は兎あれ、是れに抵抗てむひはせずに居られようか。

井田の血色が悪くなつて時々淋しい心になつた。

井田は尙ほ暗闇の中に片づけ物をして居る。相島は井田が持つて來た「帝國文學」を開いて眉を顰めながら窓明りで井田の文を読んで居た。相島はまだ獨身だが實は既に婚約をした身である。世に彼れ程外觀内容のちがつた人間も珍しからう。彼れは始終快活で吞氣でそゝつかしい骨太ではあるが、頸や手足が小さくて何處かに女性的な小兒らしい面影が見えぬでもない。然るにその内部の傾向は餘程外貌とは異なつて居る。富裕な家に生れて

攫むべき機會は幾何も與へられながらそれに對して冷淡な事は驚く計りである。一かどの専門家たり得べき才能を持ちながら、それを其の方向に用ゐようとはしない。三年程外國にも行つて居たが、歸つて來ても格別見識學問を増した様子もなく、身のとりなしが丸で二十二三の青年同様である。結婚の問題の如きも、昔から提供せられたものだが、彼れは超然としてそれを跳ね付けた。恐らく彼れの父なる人の頭に白髪が増さなんだならば、彼れは何處までもそんな調子で居たかも知れぬ。其の癖眞身に彼れの心の戸を敲くものがあると、思ひがけない藍色の悲哀がふいと顔を出す様な事もあつた。

井田が室内を片づけ終つた時は既に夕餉の支度が出來て居た。井田は湯に這入らうと持つて來た石鹼や手拭をランプ棚の上にのせて中の口に出て來た。此には五分心のランプがチャブ臺の上に載つて居る。加賀産れで丸々と克明な門徒のばアヤがもご／＼云ひながら挨拶すると、井田も口の内で何か云ひながら、世話になると云ふ心を示した。チャブ臺の上には豆腐の汁と何か魚の煮たのと井田の持つて來た淺漬とが置いてある。書生を合せて鼎座で箸を取つた。

「今日僕は教會に行きますがね。ひよつとすると桶が來るかも知れないが、さうしたら教會に居るからツて、さう云つて呉れ給へ」

と相島は書生に言ひながら井田と共に食卓を立つた。而して一寸休んだ後、袴をはいて黒い毛絲の頸巻をまき付けて氣輕相に出掛けて行つた。

井田は自分の室からソフォクレースの悲劇集を持つて來て開いて讀まうとすると、書生が來て湯の事を云ふので這入りに行つた。暗いランプの下には濛々と湯氣の立ち籠めた狭い風呂場ではあるが、長く下宿屋の生活をして町湯にばかり這入りつけた彼れには一種家庭的な心地がする。井田は暖く濕つた手拭を顔に押しあてた儘暫く解ける様な疲れの味を味つた。「相島と云ふ男は何んだつて教會へなんぞ行くんだらう、矢張り囚へられてる連

中か知らん」と思つたが、さうは解釋し度くなかつた。今井田が住む町で相島が一番趣味の合つた話相手なのである。井田は顔から手拭を取つて上向き加減に湯氣の奥の暗やみを見やつて又何と云ふ事なしに考へた。不圖隣の長岡家からけたまほしい驚いた鶏の様な聲が、手に取るばかりに聞えたので不思議をひき立てた。それが二度三度と聞える。「白痴の青年だな」と井田は思つた。而して不思議にも彼れの想ひは東京の自分の家に飛んで、弟の面影がまざ／＼と眼に浮んだ。井田の眉は烈しくひそんで同時に眸が異風に輝いた。すると又叫びが聞える。井田は舌鼓を打ちながら「傳染り相な聲だな」と不知に獨語して頭からまくしかゝる或者をつき破るかの様な勢で、さつと風呂から立上つた。

相島は其の頃丁度教會に着いて居た。迂り相な石段を上つて男子入口の戸を開けると暖い空氣と華やかな光とが暗と寒とに逆らつて流れ出た。見ると牧師は腰掛の一端に倚りかゝつて後向に一人の青年と話をして居たが、相島の這入るのを見ると、其のつや／＼しい長い髪を電燈の光に輝かして一寸挨拶をした。相島は地味な衣服を着た居竝んだ一群の婦人席を一寸顧みて末席に腰を下した。

「それでは少し讚美歌の練習をしませう」

と囁て牧師が男らしい聲で快活に云ふと、女で居ながら人の前で決して面をかぶらない、其の細君は飾氣のない身ぶりで腰掛を立上つてオルガンに近づいた。風呂敷の中から讚美歌集を取り出す音が暫くざわ／＼と聞えた。

オルガンが鳴り出すと相島は昂然として腰掛から立上つたが、餘の人は坐つた儘で居る。歌が起る。「神よ己が願ふ所は重荷を輕められん事にあらず、願ふはそを負ふに堪ふるの力を與へ給はん事なり」と云ふ意味の歌が離れ／＼の調子で物愴げに堂に満ちた。相島は低い力のある聲で半ばまで歌つたが「くだらん」と思ふと本を閉ぢて坐つて仕舞つた。而して眼をねぶつて皆の歌ふのに耳をかたむけた。離れ／＼の調子で物愴げにゆるく音律が流れて電燈の光までが暗くなる様に思はれる。「もう少しゆるく歌へば好いんだ、さうすれば基督教なんぞは